

『研修医時代の思い出』

医師としての記念すべき第1日目。こともあろうに、私は大遅刻をしてしまった。私たちの研修期間は2年間かけて、7つに分かれた内科、救命救急科、病理学を約3ヶ月ごとにローテーションするシステムであった。

私が配属された最初の科は呼吸器内科であった。いつになく早い時間に床に入り、これまたいつになく目覚まし時計を2つもかけて、翌日の初出勤に胸を馳せていたのだと思う。気負いが裏目に出たのか…。気付いたら、もう時計は10時を回っていた。頭の中が真っ白になり、慌てて医局に駆けつけたが、もう誰も部屋にはいなかった。のっけからこっぴどく怒られたのは当然である。私の医師として、いや、社会人としての初日は黒星スタートであった。



この失敗があっただろうか、呼吸器内科での3ヶ月間ほとんかがむしゃらに働いたと思う。ほとんど毎日が夜12時過ぎに帰宅するか、病院泊まりの日々であった。肺炎や肺がん患者の多い病棟である。毎朝、何人もの方の動脈の血液を採取しに回り、痰を染色したり、点滴や注射をしたり、おしっここの管を入れたり、実に朝から晩まで院内を走り回っていた。

この3ヶ月間で特に忘れられないことが2つあった。1つはある患者の死である。

30歳代の間質性肺炎の男性であった。急激に呼吸不全が進行して入院した彼は、製薬会社に勤めていた。入院時から、荒々しい呼吸をしていて、大量の酸素吸入を必要としていたにも関わらず、彼はいつも冗談を言って、私たちスタッフを笑わせてくれた。ユーモアに富んだ方であった。本人のそんな明るさは重症であることをも忘れさせてくれるようであったが、やはり病状は芳しくなかった。ステロイド大量投与にて症状は軽快したかに見えたが、それも一時的であった。入院してまだ2週間あまりのことだったと思う。

土曜日の日、私は久しぶりに自宅へ戻った。既に夜も12時を回っていたが、まだ夕食を済ませていなかった私は、もうすぐ着くという所でちょっとした飲食店が目に入り、路上駐車をしてその店に入った。匂いに誘われ、カウンターで1人で肉を焼きながら食べ始めてまだ1時間も経っていなかった時、店の外で騒がしい音が聞こえてきた。店に入ってきた人が私の肩を叩いた。「あんたの車でない?」。外に出ると、私の白い中古車が他の車に追突されて、見るも無残な形となり、数メートル先に吹っ飛ばされていたのだ。警察から事情聴取を受け、帰宅した時はもう何時だったのだろうか。

運悪く、翌朝はバイトを頼まれていて、ある病院へ車で1時間あまりかけて行き、当直をしなくてはならなかった。車を一瞬にして失った私は夜中だ

というのに他の何人かの研修医に頼みこみ、ようやく替わりを探し出した。ちょっと安心して何時間か眠ったであろうか。

翌朝はポケットベルの音で目が覚めた。何と、前述の患者さんが急変したという知らせであった。あわててタクシーを呼び出し、病院に駆けつけた時には、既にもう心臓の動きも呼吸も停止し、当直医によって救急蘇生が行われている真っ最中であった。私も悲しみをこらえながら、必死に心臓をマッサージしたが、もはや戻ることはなかった。

蘇生中、妻と2人の幼い子供が慌てて駆けつけた。子供たちは何も知らずにお母さんに付いて来たのだろう。ニコニコしながら、「お父さん」と声を出して部屋に入ってきた。しかし、お父さんの返事は無いし、目を開けることも無い。お母さんが泣き崩れる姿を見て、敏感に察したのだろう。2人の子も顔をぐしゃぐしゃにしながら、泣いた。いつかはこのような状況が予想されていたとは言え、ショックであった。助けたかった。あの時の子供たちの顔は今も忘れられない。

もう一つのエピソードは、やはり30歳台の女性の患者さんとの出会いである。

彼女は両方の肺が癌で埋め尽くされていた。全身の痛みも強く、しばしば鎮痛剤を必要としていたにも関わらず、いつも笑顔の人であった。私たち研修医は主治医ではなかったが、いわば注射の付き合いであった。覚えてたの下手な注射にも関わらず、嫌な顔をひとつ見せることなく受け入れてくれた。何となく、医師として認めてくれているようでもあり、私は嬉しかった。

ある日の晩、いつものように痛みの強い彼女に私は痛み止めの注射を打ちに行った。何となく注射に自信がついてきた頃であった。新人看護師から手渡された注射器を持ち、部屋を訪れた私は、注射針のキャップをはずして「な

んか、太い針だなあー」と思いながら、ためらいもなく注射を済ませた。一瞬、「痛い！」と彼女の声が聞こえた。何事も無いように終了したはずだったが、翌朝、彼女は他の人に聞こえないようにそっと「先生。昨日の注射の針はいつものより太かったよ。あれは、注射するときの針でないと思うよ。」と耳打ちした。「しまったー！」と思った。よくよく後で考えてみると、あの時に使った針は18Gとあって、通常は注射液を吸ったり、点滴の中に詰めたりするために使う太い針であった。さぞかし痛かっただろうに、怒りもせずに優しくアドバイスしてくれた彼女にはすまない気持ちでいっぱいになった。

研修医時代…。悲しみや悔しさもあったけど、嬉しいこともたくさんあった。恥ずかしくて人になかなか言えない失敗もたくさんあった。今、その一つ一つがかけがえの無い財産となっていると実感する。そして、色々なことを気付かせてくれた患者さんたちに心より感謝の気持ちでいっぱいである。

